

猪苗代湖の未来を考える



～沖縄県恩納村の取り組みから～

福島県立あさか開成高等学校 「総合的な探究の時間」 GRL II 沖縄探究

生徒氏名：小室基、遠藤結、本田祐子

指導教員：齋藤亨平、小松直人



要旨 沖縄県恩納村では、サンゴをはじめとする豊かな自然を観光資源としており、その保全に村を挙げて取り組んでいる。現地でのフィールドワークを通し学んできたそのノウハウを、猪苗代湖の水質保全活動に取り組む本校生に紹介し、応用できる方法がないか考察した。

背景・目的

- 本校では6年前から猪苗代湖の水質保全活動を行っている。
- 日本で有数の観光地である沖縄県恩納村では、サンゴ白化の原因の一つである赤土の流出防止プロジェクトが、様々な立場の人の協力を得て持続可能な発展に結びついていることを知った。現地にてこのノウハウを学ぶとともに、猪苗代湖の水質保全活動に活かすことはできないかと考えた。

研究手法

1 全体計画

| 月 | 活動 | 月 | 活動 |
|---|----------------|----|--------------|
| 5 | ゼミ結成 | 10 | オンライン事前学習 |
| 6 | テーマ設定、情報収集 | 11 | 訪問先アポイント |
| 7 | 情報収集、訪問先アポ | 12 | 事前学習・訪沖 |
| 8 | ※訪沖予定が台風の影響で延期 | 1 | 水環境ゼミとのセッション |
| 9 | 訪沖計画の再考 | 2 | 成果と課題のまとめ |

2 訪沖・フィールドワーク

■恩納村赤土流出防止プロジェクト

- (1) ベチバーによる「グリーンベルトと商品化・ブランド化」
- (2) サトウキビの葉を使用した「葉がらマルチング」
- (3) 緑肥カバークロップと「ハニーコーラルプロジェクト」



3 訪沖後

■水環境ゼミとのディスカッション



結果・考察

1 恩納村の取り組みから学んだこと

- (1) “課題”を“魅力”に変える発想がある
- (2) 海人、農家、学校、ホテルなど様々な立場の人の協力がある
- (3) 活動が雇用創出や次のプロジェクトの資金源につながっている(“対策”が“産業化”！)

2 水環境ゼミとのセッションから

- (1) 持続可能な水質保全活動へ
 - ・ヒシ・ヨシの回収には多額のコストがかかる。恩納村の取り組みをヒントにその課題を解決できないか。
- (2) 休耕田の活用
 - ・現在も休耕田にヒシの葉を肥料としたサツマイモ栽培が試験的に行われているが、他の用途がないか検討する。
- (3) ヨシの商品化
 - ・ベチバーとヨシは同じイネ科の多年草であり、ベチバーと同じような商品化が可能なのではないか。
 - ・稲のモニュメントを作成し、観光客向けのフォトスポットを作成できないか。
- (4) イベントやスポーツ団体とのコラボ
 - ・サイクリングやトライアスロンなどのイベント、スキー場、ファイヤーボンズ等とのコラボで、(3)の商品を販売しながら、啓発活動を行うことはできないか。

結論・今後の課題

- (1) まずは学校内での協力者を増やす。
- (2) 実現可能なヒシ・ヨシの活用方法について、水環境ゼミとの議論を継続する。
- (3) 現在協力いただいている団体とともに、学校外の協力者を探す。

参考資料 恩納村赤土等流出防止対策協議会 『R4 活動報告書』

水環境ゼミの活動の様子（ヒシ・ヨシ回収、アクアポニックス作成等）→

